

宮古諸島・伊良部島佐良浜のモトムラ（本村）で歌われる神託オヨシ（お寄せ）  
 テインガナス——長崎国枝『祭祀ノート』より——

本永 清（元宮古島市総合博物館協議会会長）

2022年3月19日（土）午後3時から同5時まで、オンラインで沖縄民俗学会3月例会（総会）が開催されました。その例会で、私は力不足ながらも講演をさせていただきました。本稿は、当日の講演資料として執筆し、事前に会員各位へ電送した原稿に、その後の知見を書き加えて公表するものです。元の発表原稿には事実誤認もありましたので、その部分は削除しました。オヨシは長編の神歌であり、その内容は神託ですが、そうしたジャンルの神歌は全国でも珍しく、地元宮古でぜひ記録しておく必要があると判断し、本誌の原稿募集に応募させていただきました。宮古方言の助詞など言語事項については、言語研究者の野原優一先生からご指導・ご助言を頂いており、ここに記して感謝申し上げます。

本日は宮古諸島のうち、伊良部島は佐良浜のモトムラ（本村）※に伝わる神歌オヨシを紹介させていただきます。オヨシの原義はおそらく「お寄せ」で、神々から神女たち（延いては村人）へのお告げ、すなわち神託ということになるかと思えます。

こうした珍しく貴重な資料は、民俗学を始めとする関連分野で広く共有し、出来るだけ多くの方々のご参加を得ていろいろと意見を交わしていけば、そこから神託に関する新しい見方・考え方なども出てくるだろうとの思いがあります。

ただし今日、モトムラでは神女の選出がうまくいかないため、年間祭祀は中断されたままだと伺っています。したがって、本日の話はすべて過去の出来事ということになり、本来ならそれは過去形で話し通さなければなりません。しかし、それでは話す側としては辛いし、聞く側もそうだろうと思います。そこで、ここでは便宜上、本日の話の本論部分を主に現在形で進めさせていただきます。

※モトムラ（本村）はその呼称からして、近世および旧藩時代の村名であろう。しかし今日、行政単位と

しての村の実態はなく、かつての村人が集まって各種の年間祭祀を実施しているに過ぎない。そこでモトムラを村として扱うか、あるいは祭祀集団として扱うか、あれこれ判断に迷うところであるが、ここではとりあえず、村として扱うことにした。そのほうが読者にとっても理解しやすいように思われる。

本題に入るに先立ち、資料の出処を明らかにしておきます。2018年3月15日、佐良浜のモトムラで神女カカランマ（憑依母）を務めたことのある長崎国枝さん（昭和26年生まれ）が、宮古島市史編さん室を訪問して下さったようです。訪問の理由は「モトムラでは近年まで、オヨシという神歌がいろんな祭りの場で歌われてきた。しかし、それら祭祀が途絶えてしまって、今ではオヨシも歌われていない。こんなにすばらしい神歌を後世に残さないでは勿体ないと考えて、オヨシをノートに記録してきた。そのノートを市史編さん室に寄贈したい」との申し出であったようです。

私は当時、同市史編さん委員の一人でした。それで後日、こちらから同室に願い出て、そのノートを見させてもらいました。数冊の大学ノ

一トにびっしり書かれたオヨシは、一見して民俗資料として目を見張るものばかりでした。しばらく日にちが経ってから私は、長崎さんの許可も得て、同室よりそのノートのコピーを頂きました。その件で長崎さんと同室には深く感謝しています。

長崎さんが市史編さん室に持ち込んだノートには、長編のオヨシ13編が記載されています。この13編はモトムラの主要な年間祭祀の神前で、神女カカランマによって連続して、あるいは選択して歌われたということです。そのほか、ノートには別の神歌10数編も記載されています。私は現在、同室と共同で、長崎さんからの聞き取りによって、非力ながらもこれらオヨシ

や神歌の共通語訳を進めています。

本日は、長崎さんのノートに記載されたオヨシ13編の中からその同意を得て1編、テインガナス(天加那志=天神)という題名のオヨシを選んで紹介します。このオヨシには「ムズビューイウサギのオヨシ」の詞書きがついています。ムズビューイウサギとは旧暦3、4月頃、神女ウホンマ宅で行われた麦の奉納祈願祭だということですが、これはその時に歌われたオヨシということでしょう。もっとも、テインガナスはムズビューイウサギに限らず、他の主要な年間祭祀の神前でも歌われたといます。以下、ムズビューイウサギを読者がイメージしやすいように、麦ビューイと記すことにします。

## I. 麦ビューイの概容

一般に、オヨシなど神歌の世界を知るためには、その舞台である祭祀についての理解が不可欠であろうと考えます。というのも、神歌は多くの場合、多かれ少なかれ祭祀の内容を反映するものだからです。そこでまず、麦ビューイの概容を説明します。ここで述べる事柄は、このあとテインガナスの歌詞を解釈していく際に、いろいろとその判断材料になろうかと思えます。以下、文章の記述を普通体にします。

※

### 1. 目的

今年の麦の収穫を神々に感謝し、来年の豊作を予祝する。その他、のちにオヨシの中で見るようにいくつかの目的を兼ねる。

### 2. 祭日

旧暦4月頃、乙巳(きのとみ)か、己巳(つちのとみ)のいずれかの日を選んで、その日の夕方から翌朝にかけて麦ビューイを実施する。つまり、麦ビューイは2日1晩にわたって実施される。

### 3. 祭場

ウホンマヤー、これは神女オホンマ(大母)宅の呼名である。そのウホンマ宅で一晩、神女たちが籠もって祈願した後、翌朝はムイムイ・マワリ(森々廻り)と称して、モトムラの主要な拝所、つまり住民の守護神・ウハルズ(大主)を祭るナナムイ(七森=大主御嶽)、布染めの神を祭るナツヴァニー(波上根)、昔の支配者・仲間豊見親を祭るナカマニー(仲間根)の3カ所をそれぞれ巡拝する。なお、長崎さんの話によれば、ウホンマ宅は神女たちの間で、ナナムイと同一視されるという。

#### 4. 女性の神役たち

ここで女性の神役とは、モトムラの年間祭祀の際、何らかの役割を担う女性たちを指し、必ずしも神女だけを意味するものではない。

##### (1) ダツナウラ (抱き直る人)、またはダツンマ (抱く母)

- ①ツカサ (司) : モトムラの最高神女で、各祭祀でのリーダー役。ただし、モトムラには今日、ツカサは置かれていない。
- ②ウホンマ : 前出。神前で神言フツ (口) を唱えたり、神歌を歌ったりして、祈願する役目の神女。祈願女。今日、かつてのツカサに代わって、各祭祀でリーダー役を務める。
- ③カカランマ (憑依母) : 神前で、神託オヨシを歌う役目の神女。アグシャー (歌者) ともいう。ただし、カカランマはその儀礼の中で、トランス状態になるわけではない。
- ④ナカンマ (中母) : ウホンマの補佐役という。神前で、ウホンマ、カカランマと並んで末席に座り、供物や線香を取り扱ったり、その他の諸事に従事したりする。

##### (2) ユームチャ (供物や祭具の運搬役)

各祭祀で、供物や祭具を祭場へ運んだり、その他の諸事を手伝ったりする女性。ユーは、ここでは供物や祭具。ウホンマ、アグシャー、ナカンマに2人ずつ付くが、大きな祭祀の時には2人、小さな祭祀の時にはそのうち1人が出て、それぞれ祭祀の手伝いをする。計6人。なお、地元ではユームチャを神女の中には含めないという。

##### (3) アニンマ (姉なる母)

前ダツナウラ3名をいう。神前で、現ダツナウラの後席に座り、諸儀礼の指導・監督に当たる。元ダツナウラ3名も、アニンマとして神前に座ることがあるが、その役目は各祭祀の執行上、何か困ったときの相談役だという。

※モトムラでは3年に一度、ダツナウラ3名が総入れ替わる。それでダツナウラを選ぶ年になると、関係者が年末に吉日を選んでモトムラ管轄のギンミザー (吟味座) という拝所に集まり、神前で神くじを降ろして次期ダツナウラを選出する。ダツナウラの任期はそれぞれ3年である。ユームチャは神くじでは選ばず、各ダツナウラがそれぞれ私的に、友人・知人に頼んでその役を務めて貰うという。なお、ギンミザーはブンミヤー (糸紡ぐ小屋) とも別称し、近世および旧藩時代における村番所の跡であるが、今はモトムラの主要な拝所の一つになっている。

#### 5. 祭祀の概容

(1) 麦ビューイの7、8日前に、神女たちがウホンマ宅に集まり、諸儀礼に必要な祭具を用意したり、神酒造りに必要な麦麴を作ったりする。

(2) 前々日は、神女たちがウホンマ宅に集まり、線香や供物を購入したり、祭具を洗ったりして、いろいろ祭祀の準備をする。神酒造りに用いる大麦 (押麦) も洗って、水分を抜くときれいな容器に移し替えて保存する。

(3) 前日は午後3時頃から、神女たちがウホンマ宅に集まり、大麦を炊くと麦麴を混ぜて神酒を造り、大・小数個の甕に入れて発酵させる。この日は神酒造りに先立ち、ダツナウラ3名がウスビシ・ニガイ (臼を据える祈願) と称して、順番に杵を取って臼で麦を搗く仕草をする。神酒を甕に入れる際には、こんどはカミビシ・ニガイ (甕を据える祈願) と称して、その甕を拝む仕草をする。

(4) 麦ビューイの初日、神女たちが午後7時頃、ウホンマ宅に集まる。そして、ウホンマが所持する

カミドイ（神提灯）、ナカンマが所持するタマドイ（玉提灯）をそれぞれ神前に灯すと、その明かりの下でユーッフフィ・ニガイ（単にユーフィ）と称する道開けの祈願をする。中心となるのはダツナウラ3名である。その手順は次の通り。①タバクヨーイ（煙草祝い）と称して、煙草を吸う仕草をする。②フツユム（口読み）と称して、神言フツを唱える。③立って祝歌「御前風」を歌う。④立って神褒め歌「カンナーギ（神名上げ）」を歌う。

(5) 午後10時頃から神女たちがアキドラ・ウサギと称して、神々からユー（富や幸）を乞う祈願をする。アキドラとは「明け寅」、つまり午前4時頃だということで、これは夜明けまで起きて、ユーを乞う祈願ということであろう。ウサギは奉納祈願。この祈願でも、中心となるのはダツナウラ3名である。その手順は次の通り。①再びタバクヨーイをする。②フツユムをする。③カカランマが神歌オヨシを13編、約2時間かけて歌う。④ハナウサギ（供物奉納）と称して、神前に飾った供物から神々の分け前を取ると所定の場所に納める。⑤休憩を兼ねて、軽食を取る。⑥神々からユーを貰い受けたとの想定で、「四つ竹踊り」「マツガマ踊り」「ハーレー踊り」の伝統舞踊を3演目、続けて踊る。そのあと、神女たちは自席に着くと起きて、明け方まで祈願を続ける。

(6) 午前6時頃、神女たちはいったん帰宅して、洗面すると着替えてウホンマ宅に戻る。そして同7時頃から、神女たちはムイムイ・マワリ（前述）と称して、ウホンマ宅を出るとモトムラ管轄の主要な拝所、前述のナナムイ、ナツヴァニー、ナカマニーの3カ所をそれぞれ巡拝する。以下、文章の記述を丁寧体に戻す。

※

## II. 神託オヨシ・テインガナスの歌詞

既述のように、麦ビューイではその初日、午後10時頃から始まるアキドラ・ウサギの中で、神女カカランマが長編のオヨシ13編を歌います。このテインガナスはその最初を飾るものです。ここでは読者の理解を助けるため、先に歌詞の【大意】を示します。そして歌詞の全体をいくつかの段落に分け、各段落では【原歌】【対訳】【語注】【解釈】の項目を設けて説明します。なお、歌詞のカタカナ表記および段落を示す数字番号は長崎さんのノートにほぼ準拠します。以下、文章の記述を普通体に戻します。

※

【大意】至高神・テインガナスが神女カカランマ（憑依母）の口を通して、モトムラを代表する神女たちに、麦ビューイの祈願の手順をお告げする。そして、神女たちがそのお告げを守って手順通り祈願するお返しに、当人たちはもちろん、村人にその念願であるユー（富や幸）の分与または授与を約束する。

【原 歌】	【対訳】
1. テインガナス ヨーイ ホヤグミ ヨネ ウスイウヤ ヨーイ デバンナ ヨネ マビト ムツ ヨーイ ホヤグミ ヨネ	1. 天加那志 大尊神 統治神の 出番では―― 真人（村人）を 抱護する 大尊神は

アタラ ムツ ヨーイ ホヤグミ ヨネ  
 バガ ウスイ ヨーイ マジルバ ヨネ  
 ティン ウスイ ヨーイ マジルバ ヨネ  
 キィバニヤティヤ ヨーイ マラサン ヨネ  
 ユカラティヤ ヨーイ ユ トラシ ヨネ  
 ユヌカギサ ヨーイ バガ ムチ ヨネ

愛民(同)を 抱護する 大尊神は  
 私が (世を) 統治して いるので  
 天が (世を) 統治して いるので  
 貧乏人といって とり残さないで  
 富者にはもちろん、ユー(富や幸)を分け与えて  
 平等に 私が 抱護して……。

【語注】○**ティンガナス**「天加那志」。天神。太陽神。モトムラの至高神。ガナスはカナスの連濁で、「愛し」を原義とし、転じて神。カナスには慣例として「加那志」の漢字を当てる。㊦ ニコライ・A・ネフスキーの遺稿『宮古方言ノート』(沖縄県平良市教育委員会刊、2005年3月31日)にはティンガナスを tip-ganasī と記し、「1. 皇天。天神。2. 琉球王」の訳を当てる。○**ヨーイ** 歌の調子を整える語。ここでは対訳を当てていない。なお、ヨーイは後に見るように、単語の語腹などに置かれて、いわゆる挿入音としても現れる。○**ホヤグミ**「大きく恐れ多い(神)」。恐れ多くも尊く、大きな存在の神。ここでは大尊神の対訳を当てた。ティンガナスに同じ。㊦ホは大きい。ヤグミは「恐れ多い、尊い」、転じて神。○**ヨネ** 終助詞「～よ」+終助詞「～ね」であろう。相手に念を押ししたり、歌の調子を整えたりする語。ここでは対訳を当てていない。○**ウスイウヤ**「覆う親」。村人を統治する親なる神。ここでは統治神の対訳を当てた。親鳥が雛を抱いている姿から連想した表現であろう。ティンガナス、ホヤグミに同じ。○**デバンナ**「出番は」。デバン(出番)+副助詞ア「～は」。ここでは前後の文脈から判断して、「出番では」と対訳を当てた。多くの神々が登場してそのオヨシが歌われる中、ティンガナスの出番では、という意に解してよかろう。○**マビト**「真人」。①村人。村の民。②成人。大人。③死者に対する生者。ここでは①。○**ムツ**「持つ」。①持つ。抱く。抱え持つ。②守る。庇護する。抱護する。ここでは②。○**アタラ**「愛しい(者)」。ティンガナスが愛しむ村人。臣民。ここでは語感を尊重して「愛民」の対訳を当てた。マビトに同じ。○**バガ**「我が」。私が。バはティンガナスの自称。ガは主格の助詞「～が」。㊦ ティンガナスは、神女カカランマ(憑依母)の口を通して、神女たち(延いては村人)にその神意を伝えるとされている。カカランマが「バガ(私が)」と第一人称で歌うのは、そうした共通観念が神女たちの背後にあってのことであろう。神と人が一体化した表現と見ることが出来る。○**マジルバ** 語義不詳。前後の文脈から判断して、あるいは「回しているので」の意ではないかとみて、前にあるウスイと合わせて「統治しているので」と対訳を当てた。○**ティン**「天」。天神。太陽神。ティンガナスに同じ。○**キィバニヤ** ①貧乏人。貧者。②病弱者。病人。ここでは①とした。○**マラサン** 洩らさないで。とり残さないで。㊦ スッサバトウン…マラサン(老人もとり残さないで)という表現が後出する(第9段落)。○**ユカラ**「良かる(者)」。①恵まれた者。富者。金持ち。②病弱者に対する健康人。働き者。③平民に対する士族。ここでは①とした。○**ユ** 日常会話ではユーと発音する。宮古の人たちのさまざまな願いを包括的に表す語。ユ(ユー)は文脈によって訳し分ける必要があるが、ここではとりあえず「富や幸」の対訳を当てた。○**トラシ**「取らせて」。渡して。分け与えて。授与して。○**ユヌカギサ** 分け隔てなく。等しく。平等に。

【解釈】至高神・ティンガナスが神女カカランマ(憑依母)の口を通して、まず名乗りをすると自分は世の統治神であることを明かすとともに、村人に等しく健康・安全で豊かな生活の保障をお告げす

る。そのお告げを受けて、神女たちが麦ビューイを実施するわけであるが、その神女たちの儀礼もまた、一つ一つがテインガナスのお告げの実行ということになる。以下、テインガナスから神女たちへ、麦ビューイの儀礼の手順が示される。

2. コトスチュウス ヨーイ カギ ドス ヨネ	2. 今年 寄る めでたい 年。
ウスヌテノ ヨーイ カギ ドス ヨネ	丑年の めでたい 年。
キヨヒヨイ ヨーイ ヒカズン ヨネ	今日の 吉日 祭日に…。
トウイ ナウス ヨーイ ヒカズン ヨネ	選びに 選んだ 祭日に…。
サンニグマ ヨーイ マビトガ ヨネ	サンニグマ (日取り役) の 真人が
コマシナディ ヨーイ アガラガ ヨネ	コマシナディ (同) の 愛民が
ナンカカラ ヨーイ アガラシ ヨネ	7日前から (神々に) 申し上げ
ヤウカカラ ヨーイ アガラシ ヨネ	8日前から (神々に) 申し上げ
アガリウル ヨーイ ヒカズン ヨネ	申し上げた (麦ビューイの) 準備日に
トウズキュウル ヨーイ イビュウイン ヨネ	届け上げた 良き 日に
カンドツヤ ヨーイ イラビ ヨネ	神時 (聖なる時) を 選んで…。
イイ ドツヤ ヨーイ イラビ ヨネ	良い 時を 選んで…。

【語注】○コトスチュウス「今年寄る〜」。今年やって来た〜。○カギ ドス「きれいな年」。良き年。めでたい年。○ウスヌテノ「丑の手の」。丑年の。ウスは十二支の丑。又は格助詞「〜の」。テは「手」を原義とし、年を表したり、年を数えたりする単位。ノは格助詞ヌに同じ。㊦このオヨシは丑年に実施した麦ビューイの中で歌われたもの。麦ビューイの実施年によって、ここの歌詞が置き換わる。例えば、麦ビューイが午年の実施ならウマヌテノ (午の手の) となる。○キヨヒヨイ「今日 (の) 吉日」。今日の良き日。○ヒカズ「日数」。特定の日を指す。ここでは麦ビューイの祭日であろう。㊦ すぐ後に来るヒカズは、その前後の文脈から判断して、麦ビューイの準備日であろう。○トウイナウス「取り直した〜」。選びに選んだ〜。ナウスは物事が願い通りに叶うこと。○サンニグマ 年間祭祀の日取りをする神女グループの呼称。オホンマ、カカランマ、ナカンマの3名で構成する。○コマシナディ サンニグマに同じ。○アガラ 前出のアタラに同じ。○ナンカカラ ヨーイ アガラシ「7日から上げて」。麦ビューイはその7日前から準備を始めるという。その準備の日を先に、神々に申し上げて…、ということであろう。○ヤウカ 8日。○アガリウル「上がっている」。申し上げた〜。○トウズキュウル 届け上げた〜。○イビュウイン いい日に。良き日に。イはイイ (いい、良い) の縮まった形であろう。ビューイはヒヨイに同じ。○カンドツ「神時」。聖なる時。祈願の時。○イラビ 選んで。選定して。○イイ ドツ 良い時。適時。

【解釈】至高神・テインガナスのお告げを受けて、神女たちが麦ビューイの実施へ向けて、いろいろと準備を重ねる場面である。モトムラでは、旧暦1月の後半に年間祭祀の日取りを行うため、麦ビューイの祭日はすでに決まっている。しかし、それでも麦ビューイの約一ヶ月前には、神女たちが日にちを選ぶとウホンマ宅に集まり、バンムツ (願持つ) と称して麦ビューイの「実施が近いこと」を神々

へ告げて祈願するという。また、麦ビューイの7、8日前にはコヨミカミ（暦拝み）と称して、これもウホンマ宅で今度は麦ビューイの「祭日＝本番の日」を神々へ告げて祈願するという。そうした2度にわたる祈願を経て、神女たちは麦ビューイの数日前から、諸儀礼に必要な祭具を揃えたり、各戸を回って供物の材料を調達したりするようである。

- |  |   |
|--|---|
| 3. ウホヅカサ ヨーイ カギニイン ヨネ<br>ウホヅカサヨーイハナヤシヨネ<br>ニガヤタガ ヨーイ ウイガミ ヨネ<br>ユームチャン ヨーイ ウカイキャ ヨネ<br>ウトジャタガ ヨーイ ウイガミ ヨネ<br>ムンチュウタガ ヨーイ ウイガミ ヨネ<br>ナミジュウルイ ヨーイ ガラマイ ヨネ<br>ユシジュウルイ ヨーイ ガラマイ ヨネ<br>ターラユウガ ヨーイ ウイガミ ヨネ<br>ティマスヤ ヨーイ カナイド ヨネ<br>ンマダリヤ ヨーイ タリュウトイ ヨネ<br>カタダリヤ ヨーイ タリュウトイ ヨネ<br>ハジュウラ ンツ ヨーイ ビシュウトイ ヨネ<br>ムムク ンツ ヨーイ ビシュウトイ ヨネ<br>ツヌヌサン ヨーイ ドツカラ ヨネ<br>ウリナナツ ヨーイ ブリヤカラ ヨネ | 3. ウホヅカサ（大司）を 中心に<br>ウホヅカサを 先頭に<br>ニガヤ（祈願女）たちまで<br>ユームチャ（供物運び）に 加勢を 頼むまで<br>親戚の 者たちまで<br>門中の 者たちまで<br>お揃いになって<br>お集まりになって<br>俵詰めの 作物まで<br>手拵で 適量を 取って<br>旨神酒を 仕込んで<br>固神酒を 仕込んで<br>大甕に 入れて 据え<br>小甕に 入れて 据え<br>昨日の （午後）三時から（準備をはじめ）…。<br>（今日は祭場に）降りる （午後）七時から |
|--|---|

【語注】○ウホヅカサ「大司」。かつて首里王府から任命された地方神女で、モトムラではその年間祭祀の統括者であったと思われるが、現在は置かれていない。ただし、オヨシの中では、最初にウホヅカサの名が出てくる。○カギニイン「りっぱな根に」。中心に。○ハナヤシ「華にして」。先頭に。先に。○ニガヤタ「願う女たち」。ウホヅカサ以外の祈願役の神女たちで、神言フツ（口）を唱えるウホンマ、神託オヨシ（お寄せ）を歌うカカランマ、ウホンマの補佐役ナカンマ（中母）の3名を指すのであろう。○ウイガミ「上まで」。ウイは、神女ニガヤタに対する敬意を示す語。～様、～殿に相当しよう。ここでは対訳を当てていない。ガミは副助詞「～まで」。○ユームチャ 供物や祭具を持ち運びする女性。○ウカイキャ「(手伝いを) 伺うまで」。手伝いを求めるまで。加勢を頼むまで。キャは副助詞「～まで」。㊦ ユームチャは、ウホンマ、カカランマ、ナカンマの各神女に2名ずつ付くが、その就任は各神女の依頼によるという。○ウトジャ 親戚。麦ビューイの準備には、ウフンマの親戚の女性たちも来て手伝うという。○ムンチュウ「門中」。門中の女性たち。ウトジャの対語。㊦ムンチュウは沖縄本島やその周辺離島などで父系親族を表す語。宮古には門中制度がないため、ここは言葉の借用と見られる。○ナミジュウルイ ヨーイ ガラマイ「並み揃いなさり」。お揃いになって。ヨーイは挿入音。○ユシジュウルイ ヨーイ ガラマイ「寄せ揃いなさり」。お集まりになって。○ターラユウ「俵世」。小麦や粟など俵に詰める穀物のほか、甘藷もその範疇に入るといふ。○ティマスヤ カ

ナイド「手杵は叶って」。神酒の材料である大麦（押麦）を両掌で搦って適量を取った、ということであろう。「手先が器用で」とか、「手際よく」とか、対訳を当てても良からう。○ンマダリ 美味しく仕込んだ神酒。旨神酒。ンマは旨く、おいしく。ダリは捏ねて、仕込んで。○タリュウトイ 捏ねて。仕込んで。○カタダリ 固めに捏ねて作った神酒。㊦ モトムラでは、神酒は炊いた大麦をつぶして麦麴と混ぜ合わせ、固く捏ねると甕に入れて発酵させるという。そして各祭祀で、その神酒を甕ごと祭場へ運んで、水で薄めて供物に用いるという。○ハジュウランツ 二斗甕に入れて発酵させた神酒。ウホンマ、カカランマ、ナカンマの3名が1甕ずつ造る。○ビシュウトイ 据えていて。○ムムクンツ 「百個神酒」。一斗甕に入れて発酵させた神酒。ウホンマ、カカランマ、ナカンマの3名が一甕ずつ造る。○ツヌヌサン ヨーイ ドツカラ「昨日の三時から」。神女たちは麦ブーイの前日、午後3時頃には祭場のウホンマ宅に集合し、いろいろと麦ビューイの準備を始めるという。○ウリナナツ ヨーイ ブリヤカラ「降りる七つ時から」。麦ビューイの初日、午後7時には神女たちはウホンマ宅に集合し、神前に供物を飾るなど祈願の準備に着手するという。

【解釈】至高神・テインガナスのお告げを受けて、神女たちがウホンマ宅で、その親戚の女性たちの手も借りて、神酒を造る場面である。神酒はカタダリ（固い神酒）、これは炊いた大麦（押麦）をつぶして麦麴と混ぜ合わせ、固く捏ねると二斗甕、一斗甕に入れて発酵させるという。ウホンマ、カカランマ、ナカンマの3神女は、それぞれ一甕ずつ、両方の神酒を造る。

最後の1節「ウリナナツ…ブリヤカラ」（降りる七つ頃から）は、次の「第4段落」につなげて解釈すると良からう。

4. ユーフィヤ ヨーイ ハナヤ シ ヨネ カギ ンツヤ ヨーイ アキュウトイ ヨネ ナナンツヤ ヨーイ アキュウトイ ヨネ カギ ンツガ ヨーイ ウイカラ ヨネ ナナンツガ ヨーイ ウイカラ ヨネ カンドウイヤ ヨーイ ツキュウトイ ヨネ ナナドウイヤ ヨーイ ツキュウトイ ヨネ カンドウイガ ヨーイ シタカラ ヨネ ナナドウイガ ヨーイ シタカラ ヨネ ウホニヤトウン ヨーイ ユイマダ ヨネ シトウニヤトウン ヨーイ ユクマダ ヨネ	4. ユーフィ（道開けの祈願）を 先に して…。 きれいな 道を 開けて 七道を 開けて きれいな 道の 上を 七道の 上を 神提灯を 灯して 七提灯を 灯して 神提灯の （明かりの）下を（歩いて） 七提灯の （明かりの）下を（歩いて） 大腿骨を 休めないで（疲れを押して）…。 脛骨を 休めないで（疲れを押して）…。
--	---

【語注】○ユーフィ 神前に供物を飾って、神々を招き入れる道開けの祈願だという。バカスブン（発酵盆）ともいう。○カギ ンツ 掃き清めた、きれいな道。カギはきれいな～。ンツは道。㊦神女たちは、麦ビューイに限らず各祭祀で、その前日には必ず祭場の清掃をしておく。神々を通る道も想定されており、そこも清掃する。○ウイカラ「上から」。上を。カラは格助詞で、起点、経過点、手段を示す。ここでは経過点。○アキュウトイ 道開けをしておいて。○ナナンツ（7道）。7つの道。ナナは聖



数。○カンドウイ「神提灯」。ウホンマが手に持つ提灯。○ツキュウトイ「点けていて」。灯していて。○ナナドウイ「七提灯」。ナカンマが手に持つ提灯。○シタカラ「下から」。灯火の明かりの下を。○ウホニヤトウン ヨーイ ユイマダ「大腿骨だけでも休まないで」。疲れたからといって、大腿骨を休めないで。つまり、疲れを押して。ウホニヤトウンのトウンは副助詞「～だけでも」。○シトウニヤ「下骨」。大腿骨に対する下骨で、脛骨のこと。

【解釈】麦ビューイの初日、定刻の午後7時となった。いよいよ祈願開始の時間である。至高神・テイナガナスのお告げを受けて、神女たちがまず道開けの祈願ユーフィを行う。その時の儀礼は特別には歌われていないが、この祈願は神々へ麦ビューイの案内を目的に行うのであろう。

2節以降は、神女たちが揃って、麦ビューイの祭場すなわちウホンマ宅へ向かう場面であろう。神女たちはいくつかの主要な祭祀で、一列をなすと提灯を灯して祭場へ向かうようであるが、長崎さんの話では、その行動はそのまま、神々の行動と見なされるという。つまり、神女たちは自分たちの行動を重ねて、神々の来臨をイメージしているわけである。

ただし、ウホンマ宅で行う麦ビューイでは、神女たちはそうした行動はとらず、各神女とも自宅から直接ウホンマ宅へ集まるという。そして、ウホンマが所持するカンドウイ（神提灯）、ユームチャが所持するタマドウイ（玉提灯）をそれぞれ灯して神前の両サイドに立てると、その明かりの下で所定の儀礼を務めるという。先の説明と整合性が取れないわけだが、ウホンマ宅はモトムラの第一拝所ナナムイと同一視されるというから、あるいは同拝所への神女たちの移動をそのまま、ここではイメージして歌っているのかも知れない。

ここでは歌われていないが、道開けの祈願ユーフィの手順は、神女たちが①タバコヨーイ（煙草祝い）と称して、タバコを吸う仕草をする。②フツユム（口読み）と称して、神言フツを唱える。③立って祝歌「御前風」を歌う。④立って神褒め歌「カンナーギ（神名上げ）」を歌う。⑤神前の供物を片付ける。

5. アキドラヌ ヨーイ ウサギユウバ ヨネ  
ヌヌ ヤパサ ヨーイ ティアッジ ヨネ  
イチュウ ヤパサ ヨーイ ティアッジ ヨネ  
カギドツガ ヨーイ ンミヤイティガ ヨネ  
イイドツガ ヨーイ ンミヤイティガ ヨネ  
カギ ブンナ ヨーイ ナミュウトイ ヨネ  
シンブンナ ヨーイ ナミュウトイ ヨネ  
カギ ブンガ ヨーイ ウインナ ヨネ  
シンブンガ ヨーイ ウインナ ヨネ

5. アキドラ（夜明け前）の 奉納は  
柔らかい 布の 上を 歩いて…。  
柔らかい 糸の 上を 歩いて…。  
めでたい 時が いらっしゃったら  
良い 時が いらっしゃったら  
めでたい 盆を（神前に）並べて  
新盆を（神前に）並べて  
めでたい 盆の 上には  
新盆の 上には

【語注】○アキドラ「明け寅」。午前4時頃の時間帯だという。○ウサギ「捧げ」。奉納祈願。○ヌヌ ヤパサ ヨーイ ティアッジ ヌヌ（布）＋ヤパサティ（柔らかくと）＋アッジ（歩いて）であろう。ウホンマ宅に来臨した神々が布の上を歩くように、ゆっくりとした足取りで神々の席つまり神座へ上がり、静かに着席する様子を歌う場面のようなのである。○イチュウ 糸。○カギ ドツ「きれいな

時」。聖なる時間。めでたくも祈願の時間。○ンマイティガ いらっしゃったら。いらっしゃると。時を擬人化し、敬意を示す。○イイ ドツ「いい時」。適時。定刻。○カギ ブン 美しく、めでたい盆。供物を載せる盆。○ナミュウトイ 並べていて。○シンブン 新盆。ただし、これは購入したばかりの新盆というわけではなからう。

【解釈】至高神・テインガナスのお告げを受けて、神女たちが麦ビューイの本番アキドラ・ウサギへ向けて、いろいろと準備する場面である。この場面で神女たちは、ウホンマ宅に来臨した神々が布の上を歩くようにゆっくりとした足取りで、神々の席つまり神座へあがり、静かに着席したと想定するのであろう。さて、神々の時となった。ウホンマがまず神前に、供物を載せる大盆3台を自らの手で並べる。

6. ウシュウビンナ ヨーイ ハナヤシ ヨネ  
 ムムクユウバ ヨーイ ハナヤシ ヨネ  
 ウジャキハナ ヨーイ ハナヤシ ヨネ  
 ムラギハナ ヨーイ ハナヤシ ヨネ  
 カン ウラス ヨーイ ウホユバ ヨネ  
 ティダ ウラス ヨーイ ウホユバ ヨネ  
 ブンカズン ヨーイ ムヤガリ ヨネ  
 ダイカズン ヨーイ ムヤガリ ヨネ  
 カンタカラ ヨーイ クパンナ ヨネ  
 ウイタカラ ヨーイ クパンナ ヨネ  
 ユヌカギサ ヨーイ ナミュウトイ ヨネ  
 インヌユウヌ ヨーイ ウホユバ ヨネ  
 イスヌユウヌ ヨーイ ウホユバ ヨネ  
 ブンカズン ヨーイ ムヤガリ ヨネ  
 ダイカズン ヨーイ ムヤガリ ヨネ  
 ハジュウラ ンツ ヨーイ ウイカラ ヨネ  
 ムムク ンツ ヨーイ ウイカラ ヨネ  
 ツヅナウス ヨーイ ウホジャラ ヨネ  
 ナミナウス ヨーイ ナナスヂャラ ヨネ  
 ブンフソク ヨーイ ティヤニャン ヨネ  
 ダイフソク ヨーイ ティヤニャン ヨネ

6. お酒瓶の 酒 (泡盛) を はじめ  
 百個瓶の 酒を はじめ  
 お酒花を はじめ  
 盛り上げ花を はじめ  
 神が 降ろす 穀物は  
 天太 (同) が 降ろす 穀物は  
 盆ごとに 盛り上げて  
 台 (同) ごとに 盛り上げて  
 神々からの 塩は  
 上々からの 塩は  
 同じように 並べて  
 海の 幸、 大漁は  
 磯の 幸、 大漁は  
 盆ごとに 盛り上げて  
 台 (同上) ごとに 盛り上げて  
 大甕から 神酒を (酌んで)  
 小甕から 神酒を (酌んで)  
 注いで 満たした 大皿は  
 満たして 並べた 七つ皿は  
 盆不足が ないように…。  
 台不足が ないように…。

【語注】○ウシュウビン「お酒瓶」。銚子に似た酒器、またはそれに注いだ酒 (泡盛)。ここでは後者。  
 罎ウシュウビンは、ウホヅカサがその在任中、自宅で保管する。○ムムクユウ「百個酒」。複数の小さな酒瓶、またはそれに注いだ酒。○ウジャキハナ「お酒花」。酒の美称。○ムラギハナ「盛り上げ花」。酒器に満たした酒。盛り酒。ウジャキハナの対語。○カン ウラス ヨーイ ウホユバ「神が降ろす穀物をば」。神々が天から降ろしてくれる穀物は。罎ウホユの原義は「大穂」、転じて主食となる穀物。

小麦もその一つ。○ティダ「天太」。①太陽。②太陽神。ここでは②。○ブンカズン「盆数に」。盆ごとに。ブンは供物を飾る大盆。カズは接尾辞で、～ごと。○ムヤガリ 盛り上げて。高く積み上げて。○ダイカズン「台数に」。台ごとに。○カンタカラ 神々からの。㊦カンタカラを「(海の) 彼方から」と解釈する神女もいる。○クパン 海の塩。○ウイタカラ 上々(神々)からの。○ナミュウトイ 並べて。並べて飾り。○インヌユウヌ ヨーイ ウホユバ「海の幸の大漁をば」。海の幸、大漁は。インヌユウは海の幸。ウホユは、ここでは大漁。㊦ モトムラではかつて、各祭祀でインヌユウと称して、大イワシの干物を神前に供えていたが、今は市販の煮干しで済ましているという。○イスヌユウ「磯の幸」。磯の幸。インヌユウの対語。○ツツナウス ヨーイ ウホジャラ「注ぎ直す大皿」。神酒を注ぎ満たした大皿。○ナミナウス ヨーイ ナナスチャラ「並べ直す七つ皿」。神酒を満たして神前に並べて飾った七つ皿。ナナスチャラにはナカンマが神酒を注ぐ。○ブンフソク ヨーイ ティヤニャン「盆不足とはないように」。大盆上に飾る供物の品々に、不足や漏れがないように。

【解釈】至高神・テインガナスのお告げを受けて、これもウホンマが次に、大盆3台の上には供物の品々を載せて神前に飾る場面である。実際には、ウホンマが神前に飾る供物の品々は、このオヨシの中で歌う順番で列挙すると酒(泡盛)、小麦などの穀物、塩、煮干し、神酒、等々である。その際、神女たちは供物の品々に不足や漏れがないように、細心の注意を払うという。

7. ウカウマーヤ ヨーイ ティンウキ ヨネ	7. お香束を 手に 受けて
シタウイガ ヨーイ ウヤダシ ヨネ	下上の(神々への) 焚き香を 出して
ユンフソク ヨーイ ティヤニャン ヨネ	数え不足が ないように
スズフソク ヨーイ ティヤニャン ヨネ	本数不足が ないように
ウカウジャーン ヨーイ アガラシ ヨネ	お香座に 上げて(運んで)
ウカウーヤ ヨーイ ツキュウトイ ヨネ	お香を 焚いて
アカルビィヤ ヨーイ ツキュウトイ ヨネ	明るい 火を 点けて
アカルビィガ ヨーイ ウイカラ ヨネ	明るい 火で(もって)
ムムハイド ヨーイ アガラシ ヨネ	百拝して (神々へ) 案内 申し上げて
シンハイド ヨーイ アガラシ ヨネ	千拝して (神々へ) 案内 申し上げて
アガリウル ヨーイ ブンカラ ヨネ	申し上げた 線香で(もって)
トウズキュウル ヨーイ ブンカラ ヨネ	届け 申した 線香で(もって)

【語注】○ウカウマー「お香包み」。線香の束。マーは丸く包装した形状の物を表す。○ティン ウキ 手に受けて。手に取って。㊦ 各祭祀で、線香はカカランマが神前で数えて取り、それをウホンマが受け取って香炉に焚くという。○シタウイ「下上」。地上界の神々、天上界の神々へ向けて取る線香。○ウヤダシ「ウ」は「香の上」で、各神へ向けて取る香であろう。焚き香と呼ぶことにした。○ユンフソク「読み不足」。線香の数え不足。ユンは、ここでは数える。○スズフソク「筋不足」。線香の本数不足。スズは細長いものを数える単位。○ウカウジャー「お香座」。線香を立てる場所、またはそこに置いた大香炉。㊦ 麦ビューイなどウホンマ宅で行う各祭祀では、海の砂を大ポールに敷き詰めると

神前に安置してウカウジャーとし、香炉としても利用するという。○アガラシ「上げて」。(お香座に) 運んで立て。○ツキュウトイ(線香に)火を点けて。焚いて。○アカルビィガ ウイカラ「(線香の) 明るい火の上から」。明るい火でもって。～ガは格助詞「～の」。ウイはアカルビィを神聖視した表現。ここでは対訳を当てていない。～カラは格助詞「～から」で、ここでは手段を表すため、「～でもって」と対訳を当てた。○ムムハイド ヨーイ アガラシ「百拝ぞ上げて」。百拝して線香の火でもって神々へ案内をかけて、という意であろう。○シンハイド「千拝ぞ」。千拝して。○アガリウル ヨーイ ブンカラ「上がっている分から」。神々へ案内をかけて焚いた線香の数でもって、の意であろう。○トウズキュウル「届け申した～」。アガリウルに同じ。

【解釈】至高神・テイנגナスのお告げを受けて、ウホンマが次に、神前の「お香座」(香炉)に線香を焚く場面である。線香はカカランマが数え、束ねると特別の小箱に入れて神前に飾る。それをウホンマが受け取って、火を付けてから「お香座」に立てる。ウホンマが自席へ戻り、祝詞を唱えて祈願を始めるとカカランマ、ナカンマの2人も、それに続くという。3人の祝詞は共通ではなく、その内容は各人各様であるという。

8. キュウ ニガイ ヨーイ ウサギヤ ヨネ  
 タダニガイ ヨーイ トヤラン ヨネ  
 ベツウサギ ヨーイ トヤラン ヨネ  
 マイヌ ユウヌ ヨーイ ハダ カラ ヨネ  
 マイサズガ ヨーイ ハダカラ ヨネ  
 トシカズン ヨーイ ウサギユイ ヨネ  
 ハダカズン ヨーイ ウサギユイ ヨネ  
 ムズビュウイヌ ヨーイ カギ ブン ヨネ  
 ティダビュウイヌ ヨーイ カギ ブン  
 シタウイン ヨーイ アガラシ ヨネ  
 アガリウル ヨーイ ブンカラ ヨネ  
 トウズキュウル ヨーイ ブンカラ ヨネ

8. 今日の 祈願 奉納は  
 ただの 祈願では ない。  
 別目的の 奉納では ない。  
 前任の ユウヌヌスの 頃から  
 前サズ(同)の 頃から  
 年ごとに 奉納して いる  
 肌ごと(同)に 奉納して いる  
 麦ビューイの めでたい 盆(供物)だ。  
 天太祭の めでたい 盆(供物)だ。  
 下上(の神々)へ お供えて  
 お供えした 盆(供物)で(そのお返しに)…。  
 お届けした 盆(供物)で(そのお返しに)…。

【語注】○キュウ ニガイ「今日願い」。今日の祈願。麦ビューイ。キュウは今日、本日。ニガイは願い、祈願、神事など。○ウサギ「捧げ」。供物の奉納、献上。○タダニガイ ヨーイ トヤラン「ただの祈願ではない」。普通の祈願ではなく、特別の祈願だ、の意。トヤランは「～ではない」。㊦この一節は、麦ビューイがモトムラにとって単なる祈願ではなく、特別に重要な祈願であることを強調するのであろう。○ベツウサギ「別捧げ」。目的が別にある奉納。別目的の奉納。○マイヌ ユウヌ ヨーイ ハダカラ 「前のユウの肌から」。この祈願・奉納は前任の神女ユウヌヌスの頃から、の意であろう。ハダはトシ(年)の対語。㊦マイヌ ユウを「前の代」(先代)の意に解釈することも出来るが、この後に続けて神女名マイサズ(前サズ)が出て来るので、これは前任の神女ユウヌヌス(世の主)のことだと判断した。モトムラには今日、ユウヌヌスという神女はいないが、宮古のいくつかの集落にはそうした呼名の

神女がいて、各祭祀でウホンマと同じ役割を果たしている。一方、これも近世の頃の村名であろうと思われるナカムラ（仲村）でも、モトムラとほぼ同内容のオヨシが歌われており、そのオヨシでは「マイヌ ユウ」の対句として「ムカシユ（昔世）」が出てくる。それからすると「マイヌ ユウ」を「前の代」と訳しても良いことになる。○マイサズ「前サズ」。前任の神女サズ。○トシカズン「年数に」。年ごとに。毎年。カズは接尾辞。○ウサギユイ 絶やすことなく、奉納している。○ハダカズン「肌数に」。年ごとに。毎年。○ムズビユウイヌ ヨーイ カギ ブン「麦ビューイのめでたい盆」。ブンは、ここでは盆上の供物。ここに来てはじめて、今日の祈願が麦ビューイであることが明らかにされる。○ティダビユウイ「天太祭」。天太（天神）から授かった祭り。○シタウイ「下上」。地上界の神々、天上界の神々。ここでは「下上（の神々）」の仮訳を当てた。○アガラシ「上げて」。ここでは、お供えして。○アガリウル ヨーイ ブンカラ ヨネ「上げてある盆から」。お供えした大盆上の供物でもって祈願し、そのお返しには、の意であろう。

【解釈】至高神・テインガナスのお告げを受けて、神女たちが夜通し起きて、アキドラ・ウサギを行う場面である。その開始は午後10時頃だという。その手順は次の通り。①再びタバコヨーイをする。②フツユムをする。③カカランマが神託オヨシを13編、約2時間かけて歌う。④ハナウサギ（花捧げ）と称して、神前に飾った供物の品々から神々への分け前を取る。⑤休憩を兼ねて、軽食を取る。⑥神々からユ（富や幸）を貰い受けたとの想定で、感謝と喜びを表して「四つ竹踊り」「マツガマ踊り」「ハーレー踊り」の伝統舞踊を3演目、続けて踊る。

アキドラ・ウサギに重ねて、神女たちは神々の饗宴をイメージしているようである。アキドラ・ウサギについて、オヨシの中では「今日の祈願は、ただの祈願ではない。前々から受け継いだ由緒ある祈願だ。地上界の神々、天上界の神々に奉納せよ。そのお返しには……」と歌って、以下そのお返しの内容が例示される。

9. マビトタガ ヨーイ ウイユバ ヨネ	9. 真人（村人）たちは…。
アタ（カ）ラタガ ヨーイ ウイユバ ヨネ	愛民（同）たちは…。
アサドムト ヨーイ ムトヤシ ヨネ	父上を 元に
ナスジャウズ ヨーイ ニビトリ ヨネ	生母を 中心に
ズバナタガ ヨーイ ウイガミ ヨネ	子供たちまで
アウパタガ ヨーイ ウイガミ ヨネ	青年たちまで
スッサパトウン ヨーイ マラサン ヨネ	老人も とり残さないで
ガンジュウサド ヨーイ タスキミュウ ヨネ	長寿を 授けると しよう。
ドウジャウサド ヨーイ タスキミュウ ヨネ	健康を 授けると しよう。

【語注】○アサドム「父殿」。父親。父上。○ムトヤシ「元はして」。元に。○ナスジャウズ「産み上手」。子供を五体満足（健康）に産んでくれた母親。生母。実母。○ニビトリ「根を取り」。中心に。○ズバナ「地花」。若芽、転じて子供。○アウパ「青葉」。青年。若者。○スッサパ「白葉」。年寄り。老人。○ガンジュウサ「頑丈さ」。長命。長寿。○タスキミュウ「助けてみよう」。授けるとしよう。

○ドウジャウサ「胴丈夫さ」。身体の健康、あるいは健康な身体。

【解釈】至高神・テインガナスが神女たちに、村人の健康・長寿を約束する場面である。これによって、麦ビューイの目的が第一には、村人の健康・長寿の祈願であることが理解できよう。このオヨシの第一段落で、テインガナスから村人へのユー（富や幸）の分与または授与が約束されたが、その一つがまず村人の健康・長寿の保障ということになる。

10. ダヤズユウガ ヨーイ ウイウバ ヨネ  
 ンスズユウガ ヨーイ ウイウバ ヨネ  
 ンナムズガ ヨーイ スウジャダニ ヨネ  
 ナウラミイヤ ヨーイ ハツダニ ヨネ  
 ナガヒギヤ ヨーイ ムトヤシ ヨネ  
 ウホギャンガ ヨーイ ウイガミ ヨネ  
 タカグルガ ヨーイ ウイガミ ヨネ  
 ウホムズガ ヨーイ ウイガミ ヨネ  
 ウイヌユウヌ ヨーイ ウイガミ ヨネ  
 ンタガミヌ ヨーイ ウホユバ ヨネ  
 ナナイガミ ヨーイ ムヤガリ ヨネ  
 アッジャガミ ヨーイ フィサマテイ ヨネ  
 キッジャガミ ヨーイ フィサマテイ ヨネ  
 ナツヌユウヌ ヨーイ ウイウバ ヨネ  
 ミルクユウヌ ヨーイ ウイウバ ヨネ  
 インギダーキ ヨーイ ニユヤシシ ヨネ  
 ウホヤマン ヨーイ タラシュウトイ ヨネ  
 アウヤマン ヨーイ タラシュウトイ ヨネ  
 シタムスン ヨーイ ワーラサン ヨネ  
 アアムスン ヨーイ ワーラサン ヨネ  
 ヤーカズヌ ヨーイ ウインカイヤ ヨネ  
 キュウカズヌ ヨーイ ウインカイヤ ヨネ  
 トウテイハダ ヨーイ ユシイミイダ ヨネ  
 アマリハダ ヨーイ ユシイミイダ ヨネ

10. 田畑の 豊作は…。  
 穀物の 豊作は…。  
 小麦の 兄種  
 大粒の 初種  
 長芒（小麦）を はじめ  
 高黍まで  
 高稈まで  
 大麦まで  
 土上の 作物まで  
 土中の 作物（甘藷）は（大きく実って）  
 七重に （土が）盛り上がって  
 （田畑の）端々まで （出来して）下さって  
 （田畑の）脇々まで （出来して）下さって  
 夏の 作物（粟）は  
 弥勒世果報（同）は  
 海木（珊瑚）の ように 根付かせて  
 大山の ように （葉を）垂れさせて  
 青山の ように （葉を）垂れさせて  
 地虫に 晒さないで  
 上虫に 晒さないで  
 家ごとに  
 軒ごとに  
 たくさん 出来して あげると しよう。  
 余るほど 出来して あげると しよう。

【語注】○ダヤズユウ 田畑の作物。佐良浜には水田がないため、ここでは専ら畑のことであろう。ユウはユーの別表記で、ここでは畑の作物、またはその豊作。○ンスズユウ 穀物、またはその豊作。○ンナムズ 小麦。○スウジャダニ「兄種」。小麦は3月頃、他の穀物より先駆けて収穫するので、スウジャダニともいう。○ナウラミイ「直る実」。大粒に稔った小麦、という意であろう。○ハツダニ「初種」。諸穀物のうち、最初に収穫する穀物。小麦。○ナガヒギヤ「長髭」。長芒の小麦。○ムトヤシ 元。はじめに。第一に。○ウホギャン「大黍」。黍。イネ科の一年草。○タカグル「高稈」。

黍の稈が高いことによる呼称。ウホギャンの対語。○ウホムズ 大麦。押麦になったものを購入してきて、神酒を造るという。○ウイヌユウ「上の作物」。地上の莖に実を付ける作物。ユウは、ここでは麦や粟など穀物一般。○ンタガミ 地下莖。根莖。ここでは甘藷。○ナナイガミ ヨーイ ムヤガリ「七重まで盛り上がり」。甘藷が地中で大きく育って、畑の表土が七重状に盛り上がりしているさまであろう。○アツジャ 畑の端または脇。○フィサマテイ 下さって。テインガナスの自尊表現であらう。○キツジャ アツジャに同じ。○ナツヌユウ「夏の世」。粟のことだという。○ミルキュウ 弥勒世果報。ここでは粟の豊作。○インギダーキ「海木ほどに」。インギは海底の珊瑚。ダーキは副助詞「～だけ(丈)」。これは程度を示す。○ニユヤシシ「根はして」。しっかり根付かせて。根を固めて。○ウホヤマン ヨーイ タラシュウトイ「大山に垂れさせて」。畑の作物が一面、大山と見間違ってくるくらいに、その葉を地上に垂れているさまであろう。豊作の象徴。○アウヤマ 青山。○シタムス 地虫。土中に潜む農作物の害虫。○ワーラサン 晒さないで。罽「召させないで」と解釈することも可であらう。その場合、シタムスを擬人化し、敬意を示していると見ることが出来よう。○アアムス「上虫」。農作物の葉や莖に着く害虫。○ヤーカズ 家ごとに。○キュウカズ 軒ごとに。キュウは家を数える単位。○トウティハダ たくさん。大量に。粟や麦など穀物を両掌で十回掬って取る分量だという。○ユシミイダ「寄せてみよう」。出来してあげるとしよう。○アマリハダ 余るほど。大量に。

【解釈】至高神・テインガナスが神女たちに、農家の畑の豊作と害虫予防を約束する場面である。これによって、麦ビューイの目的が第二には、小麦、大黍、大麦、粟の四穀、それに甘藷など農作物の豊作祈願であることが理解できよう。害虫予防がそれに付随しよう。畑の豊作も、先のユー(富や幸)の一つということになる。なお、モトムラには水田がないため、オヨシの中に米は出てこない。

11. タビカリユウガ ヨーイ ウイユバ ヨネ  
 イチカリユウガ ヨーイ ウイユバ ヨネ  
 カリユシバマ ヨーイ ウイカラ ヨネ  
 ウヤキバマ ヨーイ ウイカラ ヨネ  
 ウホニガ ヨーイ イジャウバン ヨネ  
 フニガマガ ヨーイ イジャウバン ヨネ  
 スマスマウ ヨーイ カユウバン ヨネ  
 クニクニユ ヨーイ カユウバン ヨネ  
 カイマタン ヨーイ ウラマイ ヨネ  
 マンツヌス ヨーイ ホヤグミ ヨネ  
 アカチュウナヤ ヨーイ ハユトウイ ヨネ  
 カドイナーヤ ヨーイ ハユトウイ ヨネ  
 アカチュウナーヌ ヨーイ ウイカラ ヨネ  
 ヤサトヤーユ ヨーイ カユイニャン ヨネ  
 トナイヤーユ ヨーイ カユイニャン ヨネ  
 アスンビーヌ ヨーイ カギタビ ヨネ  
 ドウハイヌ ヨーイ カギタビ ヨネ

11. 海旅は——  
 船旅は——  
 めでたい 浜から  
 富の 浜(同) から  
 大船が 出ても  
 愛船が 出ても  
 島々を 行き来しても  
 国々を 行き来しても  
 狩俣に おられる  
 真道主と いう 大尊神が  
 赤綱を 張り巡らせて (いるので)  
 角縄を 張り巡らせて (いるので)  
 赤綱を 手繰って  
 隣近所を 行き来するように  
 隣家を 行き来するように  
 気楽な めでたい 船旅 (を保障しよう)。  
 安全な めでたい 船旅 (を保障しよう)。

【語注】○タビカリユウ「旅嘉例」。タビは、ここでは海旅、船旅、航海。カリユウはめでたい、の形容。船の意にも用いる。○イチカリユウ「糸嘉例」。張った糸を手繰って行くような、安全な船旅。○カリユシバマ「嘉例浜」。めでたい浜。○ウヤキバマ「富貴浜」。外から富が入ってくる浜。富の浜。○ウホニ 大船。○イジャウバン 出ても。出航しても。バンは副助詞「～も」。○フニガマ「船小」。愛船。～ガマは愛称の接尾辞。㊦ フニガマを小舟、の意にとる神女もいる。○スマスマ 島々。○カユウバン「通つても」。行き来しても。往来しても。○クニクニ 国々。スマスマの対語。○カイマタ 狩俣。宮古本島の最北端に位置する集落で、佐良浜からは海を隔てて、目視できる対岸にある。○ウラマイ おられる。いらっしゃる。○マンツヌス「真道主」。航海安全の神。マンツは海の道、海路。ヌスは神の同義語。㊦マンツヌスは、狩俣の磯津御嶽に祭る航海安全の神。○アカチュウナ 赤綱。㊦モトムラの人たちの間では、海には目に見えない赤い綱が島々を結んであちこち張り巡らされており、その赤い綱を船で辿っていけば無事に目的地へ到着できるとの信仰があるという。ここで赤い綱が出てくるのは、モトムラの漁民たちが虫除けのため、漁網にフカ(鮫)の血を塗って用いるからではないかという。○ハユトウイ 張っていて。張り巡らせていて。○カドイナー「角縄」。四方八方に張り巡らされた赤縄。○アカチュウナーヌ ヨーイ ウイカラ「赤綱の上から」。赤綱を辿って行けば、の意であろう。○ヤサトヤー「家里家」。同じ里内の家々。隣家。隣近所。○カユイニヤン 通うように。行き来するように。○トナイヤー「隣り家」。ヤサトヤーの対語。○アスンビーヌ「足を伸ばしての」。気楽な～。○カギ タビ「きれいな旅」。めでたい船旅。○ドウハイヌ「胴栄えの」。身に危険のない、安全な～。

【解釈】至高神・テインガナスが神女たちに、村人の航海安全を約束する場面である。これによって、麦ビューイの目的が第三には、村人の航海安全の祈願であることが理解できよう。航海安全もユー(富や幸)の一つということになる。モトムラの住民には、かつて海を生活の場にする者が多かったであろう。また、宮古島や他の島々との交通手段もかつては船であった。この段落には、そうしたモトムラの住民たちの過去および現在の生活が反映されているように見える。

12. リュウキュンツ ヨーイ ウイユバ ヨネ  
 ウヤキンツ ヨーイ ウイユバ ヨネ  
 カリユシバマ ヨーイ ウイカラ ヨネ  
 ウヤキバマ ヨーイ ウイカラ ヨネ  
 ウホニガ ヨーイ イジュウバン ヨネ  
 フニガマガ ヨーイ イジュウバン ヨネ  
 イトウツヌ ヨーイ ホヤグミ ヨネ  
 カドツヤ ヨーイ アキュウトイ ヨネ  
 インヌユウヌ ヨーイ ウホユバ ヨネ  
 イスヌユウヌ ヨーイ ウホユバ ヨネ  
 アガタウイ ヨーイ ウホユバ ヨネ  
 トウサウイ ヨーイ ウホユバ ヨイ  
 アッジャバラ ヨーイ ユシュウトイ ヨネ

12. 琉球への 道(航路)は——  
 富の 道は——  
 めでたい 浜から  
 富の 浜から  
 大船が 出ても  
 愛船が 出ても  
 港口の 大尊神が  
 港門を 開けて いて  
 海の 幸、 大漁は  
 磯の 幸、 大漁は  
 彼方からの 大漁は  
 遠方からの 大漁は  
 (網で) 渚に 引き寄せて



スナスバラ	ヨーイ	ガニュートイ	ヨネ	(網で) 砂原に 囲んで きて
アウスウイ	ヨーイ	ウホユバ	ヨネ	外海からの 大漁は
フカサウイ	ヨーイ	ウホユバ	ヨネ	深海からの 大漁は
アドウダツン	ヨーイ	ユシュウトイ	ヨネ	足下に 引き寄せて
ヒサダツン	ヨーイ	ガニュートイ	ヨネ	足裏の 傍に 囲んで きて
サントツガ	ヨーイ	ドツガミ	ヨネ	(午後) 3時までには
ウヤキドス	ヨーイ	ドツガミ	ヨネ	大漁船の 帰港時までには
ナガバタド	ヨーイ	アガラシ	ヨネ	(豊漁の) 長旗を 揚げて
シンバタド	ヨーイ	アガラシ	ヨネ	(豊漁の) 千旗を 揚げて
ナガバタヌ	ヨーイ	シタカラ	ヨネ	長旗の 下を (歩かせて)
シンバタヌ	ヨーイ	シタカラ	ヨネ	千旗の 下を (歩かせて)
カリユシバマ	ヨーイ	ウインカイヤ	ヨネ	めでたい 浜には
ウヤキバマ	ヨーイ	ウインカイヤ	ヨネ	富の 浜には
ミハナブタ	ヨーイ	ガラシミュウ	ヨネ	ほくそ笑んで 立たせると しよう。
ウムティブタ	ヨーイ	ガラシミュウ	ヨネ	誇らしげに 立たせると しよう。
サウガタミ	ヨーイ	ウホユバ	ヨネ	竿で 担ぐ ほどの 大漁は
ヤクガタミ	ヨーイ	ウホユバ	ヨネ	枋(おうこ)で 担ぐ ほどの 大漁は
ヤーカズヌ	ヨーイ	ウインカイヤ	ヨネ	家ごとに
キユウカズヌ	ヨーイ	ウインカイヤ	ヨネ	軒ごとに
トウテイハダ	ヨーイ	ユシイミイダ	ヨネ	大量に 分け与えると しよう。
アマリハダ	ヨーイ	ユシイミイダ	ヨネ	余るほど 分け与えると しよう。

【語注】○リュウキュンツ「琉球道」。琉球王国時代の宮古・那覇間の航路。○ウヤキンツ「富貴道」。富の道。○イトウツ「出で口」。港口。○カドツ「門口」。港門。○アキュウトイ 開けていて。○インヌユウ 海の幸。大漁。○ウホユ「大幸」。イワシやアイゴの稚魚など回遊魚の大漁。○イスヌユウ 磯の幸。磯に寄り来る回遊魚。インヌユウに同じ。○アガタウイ 遠方からの～。○トウサウイ 彼方からの～。○アツジャバラ「海の傍原」。渚。○ユシュウトイ「寄せていて」。 (網で) 引き寄せて。○スナスバラ「砂の原」。砂浜。○ガニュートイ「囲んでいて」。 (網で) 囲んできて。○アウスウイ 外海。○フカサウイ 深海。○アドウダツ 踵の傍。○ヒサダツ 足元。○サントツ「3時」。漁に出た船が帰港する午後3時頃だという。トツは時や刻。○ウヤキドス「富貴時」。大漁船が帰港する時間。○ナガバタ 豊漁を示す長旗。○アガラシ 掲げて。○シンバタ 豊漁を示す、たくさんの小旗。○ミハナブタ ご満悦のさま。ほくそ笑んでいるさま。○ガラシミュウ 誇りとさせよう。自慢させるとしよう。○ウムティブタ。満面得意げのさま。誇らしげな様子。○サウ ガタミ ヨーイ ウホユバ 「竿で担ぐ大漁をば」。竿で担ぐほどの大漁は。㊦ モトムラではかつて、季節ごとに寄り来るイワシやアイゴの稚魚などを村人総出で、網を出すと浜に追い込んで捕獲した。そして大量に捕獲した小魚を若者たちが竿で担いで、各戸に配分して回ることもあったという。○ヤク 枋。担ぎ棒。

【解釈】至高神・テイנגナスが神女たちに、琉球(首里王府)へ上る者にはそこからの富を、漁民には豊漁を、それぞれ約束する場面である。これによって、麦ビューイの目的が第四には、琉球から

のさまざまな富の入手、および漁民の豊漁祈願であることが理解できよう。琉球からの富、漁民の豊漁もそれぞれユー（富や幸）ということになる。この段落の最初の数節には、モトムラの漁民たちが琉球王国時代、おそらく船乗りとして、首里へ上る宮古の役人たちに同行を求められていた頃の記憶が反映されている。その同行は、当時の宮古蔵元（政治の府）からの強制を伴う命令であったであろう。

13. キュウ ニガイ ヨーイ ウサギイヤ ヨネ  
 ムムニガイ ヨーイ ダキアリ ヨネ  
 シンニガイ ヨーイ ダキアリ ヨネ  
 シタウイン ヨーイ アガラシ ヨネ  
 テンヌジャーン ヨーイ アガラシ ヨネ  
 ンマウドヌ ヨーイ アガラシ ヨネ  
 ナナムイガ ヨーイ ウドヌン ヨネ  
 カンパナガ ヨーイ カクイン ヨネ  
 ユヌカギサ ヨーイ アガラシ ヨネ  
 ウイラニイン ヨーイ アガラシ ヨネ  
 ナンカユイ ヨーイ ムラディス ヨネ  
 ヤウカユイ ヨーイ ムラディス ヨネ  
 アヤグソウイ ヨーイ アガラシ ヨネ  
 カギサソウイ ヨーイ アガラシ ヨネ  
 バガ ユシヌ ヨーイ オヨシィ ヨネ  
 カン ユシヌ ヨーイ オヨシィ ヨネ  
 ウホズカサン ヨーイ ナミタイ ヨネ  
 ニガヤンド ヨーイ ナミタイ ヨネ  
 ユームチャン ヨーイ ナミタイ ヨネ  
 スルマウル ヨーイ ンミテイン ヨネ  
 チャウヌママ ヨーイ ナミタイ ヨネ  
 アヤヌママ ヨーイ ナミタイ ヨネ

13. 今日の 祈願 奉納は  
 百の 祈願にも 相当する。  
 千の 祈願にも 相当する。  
 下・上の神々へ 届けて  
 天の座（天上界）へ 届けて  
 母お殿（同）へ 届けて  
 七森の お殿へ  
 選ばれた 神の 屋敷へ  
 同じように 届けて  
 ウイラニィ（拝所名）へ 届けて  
 7日間 祝って 盛り上げると しよう。  
 8日間 祝って 盛り上げると しよう。  
 綾語（歌）も 添えると 届けて  
 美語（同）も 添えると 届けて  
 私が お告げした オヨシ（神託）を  
 神が お告げした オヨシを  
 ウホズカサに 並んで（歌い上げた）。  
 ニガヤに 並んで（歌い上げた）。  
 ユームチャに 並んで（歌い上げた）。  
 お揃いの 皆に  
 神帳の 通り 並んで（歌い上げた）。  
 綾帳の 通り 並んで（歌い上げた）。

【語注】○ムムニガイ ヨーイ ダキアリ「百祈願だけある」。今日の祈願は、麦の豊作はもちろん、いくつもの目的を兼ねて行われたということであろう。具体的には、村人の健康・長寿、農作物の豊穰、船人の航海安全、琉球からの富の獲得、漁民の大漁ということになる。○シンニガイ「千祈願」。いくつもの目的の祈願。○アガラシ「上げて」。ここでは、祈願の言葉、奉納の品々を神々に届けて、と解してよからう。○テンヌジャー「天の座」。テインガナスの住む天上界。○ンマウドヌ「母お殿」。テインガナスの妻クガニンマ（黄金母）が天上で鎮まる場所。㊦ なお、麦ビューイではテインガナスのオヨシのほかに、クガニンマのオヨシも歌われる。○ナナムイヌ ヨーイ ウドヌ「七森のお殿」。大主御嶽。モトムラの守護神・ウハルズ（大主）を祭る。○カンパナ「神華」。選ばれた神。ナナムイの祭神ウハルズのこと。○カクイ「囲い」。家囲い。屋敷。○ウイラニィ 拝所名。豊作・豊漁の神

を祭る。ニイの原義は「根」で、御嶽（拝所）に同じ。○ナンカユイ「7日祝」。7日間の祝い。○ムラディス 盛り上げよう。盛大に祝うとしよう。○ヤウカユイ「8日祝い」。8日間の祝い。○アヤグソウイ ヨーイ アガラシ「歌添えて上げよう」。祝詞だけでなく、神歌オヨシも歌って、下・上の神々に麦ビューイの喜びをお届けしよう、の意。アヤグは綾語、転じて歌。○カギサ「きれい（な歌）。美しい歌。アヤグの対語。○バガ ユシヌ ヨーイ オヨシィ「私が寄せたオヨシィ」。私が神女カカランマの口を通して、モトムラの神女（延いては村人）たちに伝えた神歌オヨシ。バは至高神テインガナスの自称。○カン ユシヌ「神寄せた〜」。神が託した〜。○ウホズカサン ヨーイ ナミタイ「大司に並んで」。ウホズカサの傍に並んで歌い上げた、の意であろう。ウホズカサはウホヅカサとも表記される。㊦ 既述のように、モトムラには今日、ウホズカサはいない。○スルマウル ヨーイ インミティン「お揃い群れに」。お揃いの皆に。麦ビューイの参拝者全員に。○チャウヌママ ヨーイ ナミタイ「帳のまま並んだ」。「神の帳」に定めた通り、ウホヅカサをはじめとする他の神女や一般参拝者全員に、の意であろう。チャウとは、神々が所持しているとされる「祭祀ノート」の類いであろう。○アヤ「綾」。綾帳。チャウの美称。

【解釈】至高神・テインガナスが神女（延いては村人）たちに、今日の麦ビューイの祈願が「神の帳」に定めた通り滞りなく行われたことを告げて、その終了を宣言する場面である。ここで「神の帳」とは、モトムラの神女たちが麦ビューイの実施に際し、守るべき規定のようなものであろう。それを遵守して、麦ビューイの祈願が無事に終わった、これはめでたし、めでたしということであろう。これで麦ビューイの主要な儀礼は一通り終わることになる。

その後も、神女たちは関連して諸儀礼を行うが、それについてはI. 麦ビューイの概容を参照のこと。以下、文章記述を丁寧体にする。

※

以上、佐良浜のモトムラで麦ビューイの時、神女カカランマが連続して歌いあげる長編のオヨシ13編のうち、その最初を飾るテインガナスの歌詞を見てきました。

それは「至高神・テインガナスが神女カカランマ（憑依母）の口を通して、神女たちに麦ビューイの祈願の手順をお告げするとともに、その手順を守って祈願するお返しには、当人たちはもちろん、村人にその念願であるユー（富や幸）の分与または授与を約束する」といった内容のものでした。

この神託テインガナスから何を読み取ることが出来るか、それは読み手によって、いろいろ

であろうと思います。それだけ神託として考えるべき、多彩な内容を含んでいるからです。沖縄には、神託と言われているものに古謡のミセセルが知られています。オモロの中にも、数首ですが神託として読み取れる内容のものがあります。しかし、それらを合わせても、沖縄に伝わる神託の数はごくわずかで、資料的には限られています。そんな状況の中で私たちが今日、神託とは何かを改めて問い直す上で、このテインガナスは注目してよい資料の一つだといえましょう。本日この場で、テインガナスを紹介した理由でもあります。

モトムラでは既述のように、このテインガナ

スを含めて13編のオヨシがその祭祀によって、連続して歌われたり、選択して歌われたりしたといます。モトムラのオヨシ13編については、他の神歌10数編と合わせて、私はただ今、宮古島市史編さん室と共同で長崎国枝さんから

の聞き取りにより、歌詞の共通語訳を進めているところです。同室では、その成果をどうするか今のところ未定のようなのですが、できるなら刊行して市民や研究者の目に触れさせてほしいと私的には願っています。